

米水津村周辺の考古学上の

「遺跡・遺物」発見者の物語 (二)

市野瀬 仁

縄文時代

(会員・佐伯市長島町)

正田通夫先生は、堅田の城八幡の宮司故正田泉氏の次男に生まれた。東京の大学を卒業し、定年まで東京都の高等学校で日本史を担当された。昭和六十年故郷に帰られ、家業の宮司を勤められている。また、佐伯市文化財保護委員として活躍されている方である。

ここで尊父正田泉氏についてふれておきたい。氏は、『佐伯市史』の中の「佐伯人物誌」の項に記載されている。宮司のかたわら小学校長の経験もあるが、代々宮司の家系であるためそれに専念、城八幡社の外二十余社の奉仕をされた。昭和四十四年、九十歳の天寿を全うされるまで多くの功績を残された。例えて申すと、

一 社家に伝わる堅田神楽を中心に佐伯地方の神楽を整備して「佐伯神楽」と位置づけた。

昭和五年、明治神宮鎮座十周年記念に、九州地方の

代表として佐伯神楽を神前に奉納された。引き続いて日光東照宮・鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮にも参拝して奉納されている。

二 佐伯地方の伝統や史跡・史料を調査して郷土資料集にまとめられている。有能な郷土史家であった。

三 長良・下城遺跡からの出土品を多数整理して、佐伯史談会員は公私ともに指導されている。私人としても『佐伯港の歴史と現状』を書いたため、柏江の港についてお尋ねしたことがあるが、高齢なのに耳もよく、その記憶力のよさと機敏な判断力に敬服したものである。

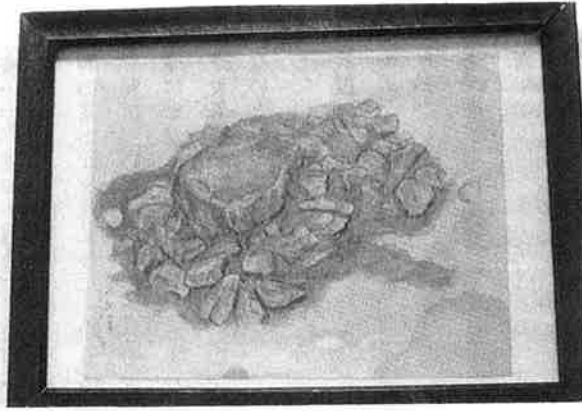
この頃見せていただいた出土品が、直接正田通夫先生の若かりし頃に出会ったことを知って驚いたわけである。

あえて尊父のことまで記した次第。

1 下城遺跡との出会い

佐伯市長良 城八幡宮司 疋田 通夫

昔、ある時代には語り部があった。



下城遺跡の真紅に焼けた台石（菅 一郎画）



下城遺跡の台地から長良遺跡を遠望する。
一軒屋の前方にある森が貝塚の出土地。

人の記憶は月日と共に薄くなり、定かでない点が多い。しかし、一面過去の事実を鮮明に伝える場合も皆無とは言えない。

昭和十三年（一九三八）、旧制中学に入学した頃だったと思う。梅雨期に拙宅（佐伯市大字長良字汐月三三四

番地）の裏手の小丘が一部崩壊した際、流出した土砂のなかに、カキ殻・貝殻などの混在していた事を今も覚えている。一瞬、どうしてこの長良台地の東南側面から、海幸の殻が出土するのか、疑問を抱いたままで、佐伯中学校を卒業し、郷土を離れた。その後数年を経て、昭和二十年（一九四五）八月終戦を迎え同年十月復員し再び故郷の地を踏むことができた。翌々年、昭和二十二年（一九四七）台風の影響で、今度は長良小丘の東北側斜面に土砂崩水が起り、多量

の貝殻・カキ殻の出土している事を村人が伝えてくれた。

早速現場に赴き調査の結果、厚さ二・三〇センチ程の貝殻層の露出面を発見した。沿道にはカキ殻や貝殻が散乱し、時折、養鶏の飼料に持ち帰ったこともあった。以後数度にわたる試掘により、動物の骨や弥生式土器の底部、また石斧の断片なども見つかった。これは貝塚に間違いないと思つた。

そして当時、佐伯高等女学校教諭の賀川光夫（現別府大学教授）に、この状況を伝え二人で幾度か長良台地及びその周辺を調査した結果、神社神殿の西に隣接して貝塚のあることが分かった。またこの小丘の東北端に立つと、下城清水川（今の田淵）一帯の舌状台地が展望できる。この地域の地表からも貝塚や土器片、さらに石鏃などが出土するとの噂も聞き、また二人で現地に足を運び、表面採集や試掘の末、遺跡の存在を確認することが出来た。

昭和二十三年（一九四八）賀川教諭と他の若干の人達で相談の上、長良貝塚及び下城遺跡の本格的学術調査発掘をしてはどうかということになり、同年六月鏡山 猛（後九州大学教授）を招き、大勢の人達の支援を得て実

施された。

その後の両遺跡における発掘経過報告は、『佐伯市史』の原始古代（七八ページから八五ページ）に、賀川光夫教授が詳細かつ専門的に説明しておられる。

この下城遺跡の発掘のなかで一番印象に残つたのは、工房鍛冶跡ではないかと思われる遺物の発見されたことであつた。真紅に焼けた縦一五センチ、横二五センチ、高さ五・六センチ程の平たい岩石と、その周辺に多量の鉄滓が散在していた。感激して、遺跡の近くにお住まいの恩師、菅一郎画伯にお願いし、その現状を水彩で写生していただいた。現在この絵画はどこにもない遺品として、額に納め、大事に保存している。

時は移り昭和六十二年二月九日、まだ厳寒の季節なのにまるで四月中旬の陽気、この日佐伯市文化財保護委員の市野瀬仁の車に同乗させていただき、長良貝塚・下城遺跡の眠る現地を訪れる機会を得、両丘陵に登り堅田盆地を俯瞰した時、実に感無量であつた。

しかし、今下城遺跡の表面は菜園と化し、真新しい家屋が数軒。また、長良貝塚は鎮守の森の杉木立と、竹草に覆われ、かつての面影はない。ただ、小丘の東北側

を「通村道沿いに「長良貝塚遺跡」と書かれた標識がぼつねんと立っている。



畑野浦字ムカイの扇山頂上より真下の露出した付近

2 蒲江町畑野浦 塩月 登

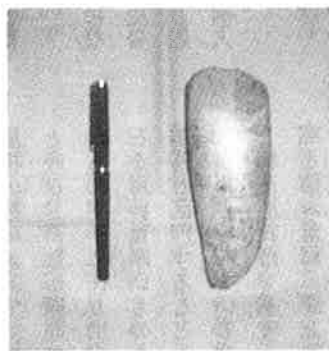
戦前、宮崎県西都原古墳群の近くに住んでいた私は、当地の中学校に入学した。この中学校は古墳群の一角に建設された学校で、いくつかの古墳を潰した。その際に発見された遺物が学校の玄関に陳列されていた。鉄製の

剣二振、磨製石斧数個、石鏃等。

また、御陵護衛官から石器類、ヒスイ勾玉など見せてもらった。

こうした環境にあった事が郷里畑野浦での発見に結びついたのであろう。石斧の発見は高校卒業後、祖父母の要望により畑野浦に帰郷した後、開墾中の出来事であった。

この石斧は弥生時代と見るのが有力となった



所在地は字ムカイ。この地区の背後にある扇山で、海拔四〇〇メートルぐらいの山の三合目付近で一二〇メートルぐらい。西向きの山で約四〇度の傾斜があり、表土層にはかなりの礫（小石）が混じっていた。祖父母と共に雑木を伐

採し耕したが、私は主に石積みを請合ったので、栗石、小石などを拾い集めた。石斧はその中にあった訳である。

礫の中でも、人工的に手を加えたものは容易に見分けがつくものである。打製石斧ならおそらく見落していたと思う。石斧には、私が発見した日付の一九五四年十一月十二日を記入している。

祖父の話では、山の八合目にある大岩には穴があったと言っているが定かではない。

石斧発見後はそのまま私が保管しているが、近年になって、町史や文化財関係の資料編さん、中学校の歴史資料や展示品として役立ってきた。直接私が専門家から鑑定してもらったことはないが、畑野浦の富沢泰が、何人かの識者に見てもらったそうである。

氏が人から聞いた話によると、佐賀県背振山地の産ではないかとのことであった。南郡の海岸地帯で発見された石斧が、打製か磨製か同一石質か知らないが、遠い佐賀県の背振山からどうして連絡を取り合ったものか疑問でならない。なお、石斧発見地帯より二〇メートルぐらいの所で植林中、弥生土器の小片も出土したこともつけ加えておきたい。

表紙解説

層 塔

層塔とは仏舍利を安置するインドの仏塔と、中国の楼阁建築とが結びついた形式のものです。石造層塔はその屋根の数によって、三重・五重・七重・九重・十三重塔と呼び、奇数が原則です。二層から上の軸部は下の屋根からわずかに作り出された程度に比較的薄いものと、別石を用いた厚いものがある。前者を多層塔、後者を多重塔と区別することもありますが、一般に三重塔・五重塔・九重塔と呼んでいる。

構造形式は、基壇・基礎を置き軸部を立て、屋根、軸部と積み重ね、最上の屋根の上に露盤・覆鉢・相輪・宝珠と積むのが普通であるが、中には変形塔もある。

この層塔は臼杵市深田にある。総高三七五センチメートル、材質凝灰岩、基礎は壇上積形式で二面に格狭間を刻む。軸部には蓮華座上に月輪を彫り、中に金剛界四仏の種子を薬研彫りし、縁に正和四年乙卯（一三一五）願主阿闍梨隆尊・合力作者阿闍利巴秀の刻銘がある。